



場所：アオッサ AOSSA6階605研修室 (JR福井駅前)

主旨説明・司会：市川秀和 (福井工業大学)

発表者：

①越前武生「廬山公園」の成立について／平野忍 (京福コンサルタント)

②人間的行為における創作と実測活動の関わり—建築家西澤文隆の実測活動の研究を通して—／西一生 (新建築設計事務所)

③渡部貞清の建築論における道元についての考察／吉見正信 (吉見設計)

④詩歌にみる住まいの風景—漂泊俳人・井上井月を通して—／川本豊 (福井工業大学大学院)

参加者によるディスカッション

参加者：14名

本企画事業は、2013年の森田慶一『西洋建築史概説』(1962)刊行50周年を記念して始まった。これまでの全6回では、京都大学を拠点とした建築史・建築論をめぐる森田慶一、増田友也、渡部貞清、玉腰芳夫の思索や建築作品などを取り上げ、さらに「学派 school としての建築論」(建築論の京都学派)についても考えてきた。今年度は、新たな創造の発信拠点として福井の地を固めていくために、北陸地域で建築論研究に関わる大学院生を始め、設計事務所・コンサルタント等の若手建築関係者を中心に企画し、「いま建築論に何が出来るのか」を広く活発に議論することが出来た。

まず司会者から主旨説明を簡潔に述べたあと、4名の発表者から現在それぞれが取り組む研究テーマを提供していた。最初に社会人2年目の若き平野忍氏は、地元福井のコンサルタントで建築設計に従事しつつ、越前武生にある造園家・本多静六設計の「廬山公園」を調査した研究内容を報告した。次に富山の建築設計事務所に勤務する西一生氏は、建築家・西澤文隆による古建築と庭園の実測図を使って、創作と実測の関わりに制作活動の持つ人間的行為の意味を論述した。そして設計事務所を自営する吉見正信氏は、学生時代の恩師・渡部貞清の建築論を取り上げ、その特徴的な道元の思想に着目して発表した。そして最後にシニア院生の川本豊氏は、幕末明治を生きた漂泊俳人・井上井月の詩歌を通して、増田友也から田中喬へと至る建築論の思索を踏まえつつ住まいの風景論を展開させて見せた。

後半のディスカッションでは、発表者に対して参加者からの質疑が活発に交わされ、さらに現代建築界に建築論の存在意義はあるのかの率直な問題をめぐって、厳しく真摯に議論されたのであった。

当日は、地元福井や北陸だけでなく、関西方面からも若手を中心にご参加をいただき、現代における建築論の課題を討論する新鮮で貴重な機会となりました。ご協力いただいた皆様に深謝いたします。さらに引き続き、来年度の第8回に向けて準備して行きたいと考えています。

## 建築文化週間2019開催報告 (本部企画)

日本建築学会

### 建築夜楽校2019

#### シンポジウム「Village in Metropolis—都市内共同体のつくりかた」

「都市内共同体のつくりかた」と題して、建築夜楽校が10月2日⑥に建築会館ホールにて開催された。都市という限定された環境のなかで、これからの時代における新しい共同体をどのように作り出すことができるかというテーマを軸に、議論が展開された。講演者には、中谷礼仁氏 (建築史家、早稲田大学教授)、武田徹氏 (ジャーナリスト、専修大学教授)、岡部明子氏 (都市計画家、東京大学教授)、大西麻貴氏 (建築家、大西麻貴+百田有希/o+h共同主宰)をお招きし、計204名(うち動画配信47名)の参加があった。

シンポジウムの前半には、4名の講演者による20分間のプレゼンテーションを行い、後半では講演内容をもとにディスカッションを行った。

講演者は「都市内共同体のつくりかた」というテーマでプレゼンテーションを行ったが、4つの異なる専門性によって多様な見解が俎上に上がった。

中谷氏は共同体を「有限集団であり、成員が存在する」ものとして定義され、それを踏まえて2019年に上梓された「未来のコミュニ」から複数の共同体の事例を参照された。例えば、シェーカー教という独自の社会集団を形成していた宗教団体はその内側で様々な実践をしていた。彼らは生殖行為を否定しており、男女が明確に分離された空間のなかで過ごしていたため、コミュニティとしての持続性はなかったが、その後残された建築は地元の小学校として再利用され、シェーカー家具と呼ばれる美しい工芸品も未だに生き残っている。アレグザンダーが言うように、形をもたなければシステムは消えてなくなるのだとすれば、シェーカー教のように特殊な空間を介して構築された共同体は、共同体の消滅後も何らかの意味を世界に残していると言える。

続く武田氏は過去に執筆された「隔離という病」というハンセン病を題材にした著書を中心に議論を展開した。武田氏によれば共同性と公共性は対立する概念であり、閉鎖的な共同性、すなわち共同体は他者を排除する理論を作り出す危険なものであると指摘する。それゆえ、武田氏は共同体ではなく「共生」という概念の重要性を主張した。共生には、大きく3つの在り方がある。聖域的共生(それぞれの文化の聖域には不可侵であるべきだという立場)、競争的共生(相互の関係に積極的に介入していく共生の在り方)、共同的共生(平等をとにかく追求する)、これらのいずれかが優れているというわけではないが、これらの多様な共生の在り方を追求することが、共同性と公共性の両立に繋がるのではないかと。武田氏は最後に、都市内共同体の成立条件として、「他者をうけいれる、格差をこえる、非暴力的な共生」という3つのキーワードをあげ、その実現として共生という考え方が重要になると語った。

岡部氏は都市をフォーマル(管理された空間)とインフォーマル(未管理の空間)とに二分して考察を進められた。世界の多くのスラム街では土地の正規化を目指しているが、フォーマル化した社会は資本マーケットに取り込まれることとなるので、共生が進まないという。フォーマル化されるということは、生活や住居の質と引き換えに、主体的な都市への参加を失うということでもある。仮にフォーマル化することを行政的な管理下に入るという意味で公共性をもつということとするならば、インフォーマルには巨大なシステムに取り込まれずに、住人が独自の自治を獲得できる共同



会場風景



建築界は建築の価値を社会に示せるかが試されている。そして2011年の東日本大震災、2013年に槇文彦氏が発表した「漂うモダニズム」は建築の既存の価値を大きく考え直す契機となった。現在建築に関わる私たちは、モダニズムがかつてそうであったように、建築が都市を魅力的にする側面を強く意識し始めている。

第4回となる建築文化考は、都市を共創する在り方を建築の価値として考えることをテーマとするシンポジウムを10月10日(土)に建築会館ホールにて開催した。パネリストには、槇文彦氏(槇総合計画事務所)を迎え、「アーバニズムの今」というテーマで講演をいただき、ウィットネスとして乾久美子氏(横浜国立大学大学院Y-GSA、乾久美子建築設計事務所)が槇氏に質問をする形式で、参加者197名とともに建築と都市のこれからについて考えた。

第一部では槇氏が建築へ向き合い始めた時代に、多くの関心が集まっていたアーバニズムから現在のアーバニズムへ、自身の設計活動の歴史をたどりながら言及した。それは槇氏だからこそ語れる大変興味深い内容であったため、ここに要約する。

「過去を振り返れば私が建築設計を志した1950年代、建築家だけでなく評論家もアーバニズムに誰もが関心をもっていた。そしてアーバニストにはいくつかの種類があった。それは「空間派、象徴派、視覚派、歴史派」、それぞれの価値観から都市へのまなざしをもっていた。その後1970年頃が転機となり、モダニズムという大きな船は大海原に投げ出された。

そのなかで私はヒューマニズムが重要と考え、「共感」の重要性を認識し始めた。それは、ヒルサイドテラスで具現化している。ヒルサイドテラスは多くの都市のオープンスペースの展開ができた。それは日本の都市の成り立ちにも関係し、私はそれを饅頭の皮とあんこの関係に例えている。そして層状の奥性が生まれるあんこに興味がある。セットバックやオープンスペース、これらが重要なのである。」

そして自身の作品を紹介しながらそこに通底して流れるのはヒューマニズムであり、それは無償の愛があるべきではないかと語った。

第二部ではウィットネスの乾氏より槇氏に質問し、さらにアーバニズムについて考えた。内容を以下に要約する。

乾：槇さんのヒューマニズムとは何ですか。

体を作り出す可能性があるだろう。しかし、スラムが実状としては出入りの激しい自由な共同体である以上、それは閉鎖的なものではなく「個が集まった連帯としての共同体」という開かれたものとして想定される必要がある。すなわちフォーマルに寄生し、万人に開かれた公共性を享受しながら、同時に自由度の高い共同体としてのインフォーマルを活用するという考え方は、これからの都市における一つの回答となり得るだろう。

大西氏は建築設計という実践を通して、小豆島での体験を中心に建築設計のプロセスがいかに隠された共同体を浮き彫りにするかを語られた。設計を進めるうえで、まちの人を集めてワークショップを行ったが、参加者は奮わなかった。ところがある一人の女の子の参加をきっかけに、たくさんの人が集まり始めたという。ワークショップを進めるにしたがい、どんな人たちがどんな関係性をもっているかということが、その日着ている服一つから読み解くことができる。すなわち一つの建物をつくるというプロセスが、岡部氏の言葉をかりればインフォーマルな共同体を生み出すこととなる。

その後のディスカッションでは、主に岡部氏のフォーマル、インフォーマルという概念を頼りに議論が進められた。上記の概念が場所を対象としているのか、手段を対象としているのかなど、前提条件を整理することで時間を使い果たしてしまっただが、未来の都市内共同体を考えるうえで重要な考察ができたシンポジウムとなった。

[山本至/itaru/taku/COL.共同主宰]



会場風景



## 建築文化考2019

### シンポジウム「槇文彦・アーバニズムの今」

21世紀、世界はメディア革命やグローバル化が進み、価値観が変化しつづけている。人々の生きる欲望の質は、必要の充足から、充足を越えて快樂の域になりはじめ、さらに要求のスピードが高速化している。進歩がかつてない速度で加速化する社会のなかで、皮肉なことに豊かさが見えなくなった。豊かなのに貧しい、この閉塞感のある状況に建

榎：私は人間に興味がある。どのような都市空間や建築にみんなが喜ぶだろうか？といった自問自答を続けている。例えば世界のこどものビヘイビアは似ている。それをどう生かすか。それが共感のヒューマニズムと考える。

乾：モダニズムの時代に、モダニズムをやや批判的に捉えながら、可能性を問いかけた最初の世代が榎さんの世代ではないかと思います。

榎：コルビュジエなどの先人は大きく偉大であった。私が考えていることは単に人への興味だけでなく規範にとらわれないことだ。現在の若い人には、規範にとらわれない世代を感じる。

乾：CIAMはやや官僚的、TeamXはもう少し違う視点でしょうか。

榎：TeamXはCIAMを乗り越える場所性にあるものをいろいろな場所で模索したが、CIAMに代わるものを提唱できなかった。

乾：何を提唱するかというトライアルとして、群造形やアーバニズムと建築を同時に語ることは難しいと思う。一方、建築を建築だけで語ることは難しい時代、都市を良くしないとイケない。日本では榎さんの世代から考え始めたと思う。

榎：自分は人と同時に都市にも興味がある。良い場所(都市)でない条件があると、それを解決したくなる。例えばスパイラルもひどい場所であったがチャミングにすることができた。

乾：ひどい場所=馬の目の前の人参、チャレンジすべきものですね。

榎：オープンスペースには種類がある。日本では隙間空間であるが、概念ではつくりにくい。

乾：オープンスペースコンペについて教えてください。

榎：建築でなくオープンスペースの国際コンペをやってみたい。例えば身障者のオープンスペースをできないか？それで人類の幸福な場所が新たに加わると思う。

乾：オープンスペースであれば、誰でも参加できる。建築家しかできない建築のつくり方は何でしょうか？

榎：例えばアナザーユートピアの三角形の広場提案、これらは建築家でしかできない提案である。

乾：建築家でしかできない強い形が意図を逸脱して使われている。それが建築家の有り様ではないでしょうか。

【関野宏行／佐藤総合計画取締役  
加藤詞史／加藤建築設計事務所主宰】

## カルチベートトーク2019

### トークイベント「Snøhetta SMALL TALK」

今年のカルチベートトークは、10月15日⑧に建築会館ホールにて開催され、世界的な注目を集める北欧ノルウェー発祥のデザイン事務所「Snøhetta」から2名の登壇者に日本での初講演をしていただいた。Robert Greenwood氏(Snøhetta/Partner, Managing Director, Architect)は、Snøhetta最初期からのメンバーでパートナーである。現在は香港事務所でもアフリカ、中近東、アジアを中心とした海外案件をマネジメントしている。もう1名のDaniel Berlin氏(Snøhetta/Architect)は、オスロ事務所をベースに活躍中の建築家で、現在デジタルガレージ社のプロジェクトで竹中工務店とコラボレーションしているチーフアーキテクトである。渋谷バルコ内のコワーキングスペースに誕生する彼らの日本初作品を担当していることから、そのプロジェクトの紹介も含め、彼らの目指す環境建築、創造型の設計手法などについて講演いただいた。

Snøhettaの業務は、建築・ランドスケープ・インテリア

## 会場風景



ア・プロダクト・グラフィックと多岐に渡り、オスロ・オペラハウスからノルウェーのクローネ紙幣までデザインを手掛けており、オスロを始め、ニューヨーク、インスブルック、サンフランシスコ、パリに事務所を持ち、いまや32か国240名の組織事務所である。彼らの仕事の進め方は、建築主とワークショップを行って問題の共有を図り、常に会話をしながらベストな解決方法を一緒に生み出す手法を取っている。

当日のトークイベントの進め方も斬新で、プロジェクト紹介ではなく、Where, Whatなどの言葉のキーワードによる問いかけをきっかけに始まり、2人のダイアログを通じて、彼らは想いを語り、そして答えを出し合いながら進行された。

Snøhettaの最新プロジェクトの美しい写真とともに、特に印象的だったのは「What is landscape?」という問いかけである。ともすれば「景観、風景」とだけ捉えがちな言葉を鍵に、建築そのものはランドスケープになりうるのか、あるいは内装は？ 家具では？ とたまたまかけてくる。それを見て、なるほど、これもランドスケープだと頷いた。

また、クライアントたちが揃いのエプロンをしてワークショップに取り組むスライドには、会場から思わず笑い声が上がった。クライアント自身がものづくりに関わり、生み出したアイデアや形をプログラムに取り入れることで一体感が生まれ、プロジェクトがスムーズに進むことを、ユーモアも交えながらプレゼンテーションしてくださった。

今回は、180名の参加者とともに考え、想いを共有する、非常に有意義で新しいカルチベートトークとなった。

【濱野裕司／竹中工務店東京本店設計部長】

## パラレル・セッションズ 2019

### ディスカッションイベント「メタなカタ」

去る10月20日⑧建築会館ホールにて、2016年度より継続しているパラレル・セッションズが、全国から建築関係者52組62名の参加のもと開催された。

今年はテーマに「メタなカタ」を掲げ、過去のセッション

のなかで明らかになってきた多様化する建築プロジェクトにおける「カタ(形式)」に着目し議論を行った。物理的な建設物のみを対象としない建築プロジェクトでは、ビルディングタイプなどの近代的なカタを当てはめることが難しい。現代的な「カタ(理念)」を構想するため、個別的なカタチ(実践)のもつ価値を尊重しつつ、そこでの経験を共有するなかから、現代的な建築実践における「カタ」とはいかなるものだろうか。

運営面では、昨年までとは異なり、各セッションをファシリテートする7名のセッションリーダーを事前に決め、彼らとともにセッションテーマを設定した。また、彼らのもつネットワークを活用するため、エントリーの約半数はセッションリーダーからの推薦とした。実施された6つのセッションの構成は下記の通りである。

## 〈セッション構成〉

Session28—「メディアプラクティス」としての建築は可能か？  
セッションリーダー：伊藤孝仁氏 (tomito architecture 共同主宰)  
登壇者：中村健太郎／坂坂留五／竹内吉彦／吉村梓／桂川大／石飛亮／太田孝一郎／山川陸／樋口永／春口滉平

Session29—リノベーションの新時代はアジアから拓くのか？  
セッションリーダー：川井操氏 (滋賀県立大学准教授)  
登壇者：池上碧／富永秀俊／大井鉄也／永岡武人／中村陸美／宮石悠平／下寺孝典

Session30—デザインとオペレーションの相互フィードバックの可能性とは？  
セッションリーダー：勝亦優祐氏＋丸山裕貴氏 (勝亦丸山建築計画共同主宰)  
登壇者：加藤優一／永井菜緒／北本直裕＋荒川佳大／横井創馬＋小野志門＋北川健太／若林拓哉／神永侑子

Session31—設計業(者)の多角的な活動による新しい組織のかたちとは？  
セッションリーダー：森元気氏 (森元気建築設計事務所主宰)

登壇者：水野太史／浜田晶則／津賀洋輔／飯田智彦／塩脇祥／岡山俊介／香月真大／針貝傑史／藤田雄介／住友恵理／梅中美緒

Session32—市民参加型アクションは都市のプランを変えられることができるのか？  
セッションリーダー：小泉瑛一氏 (オンデザインパートナーズスタッフ)  
登壇者：荻谷智大／西山芽衣／中裕樹／篠元貴之／茂谷一輝／上田孝明

Session33—ボランティアマインドは公共空間をどのように変えるか？  
セッションリーダー：山口陽登氏 (シイナリ建築設計事務所主宰)  
登壇者：井上岳／前川歩／近藤奈々子／水野茂朋／須藤剛／吉永規夫／市川竜吾

またゲストメンターとして、近藤哲朗氏 (そろそろ代表取締役社長、ビジネス図解研究所主宰)、田中里佳氏 (国土交通省中部地方整備局浜松河川国道事務所長)、古澤大輔氏 (リライト\_D代表、日本大学助教) にお越しいただき、各専門性に則って適宜示唆的なコメントをいただいた。

セッションでは、これまでの設計の取り組みからは取りこぼされてきた、曖昧で偶然な物事と向き合うためのメディアの可能性 (28 ※Session番号、以下同様) や、アジア特有のリノベーションの方法論を「移ろいの建築文化」とし、西欧のそれと対比的に位置付ける (29) など、設計における新たなカタが模索された。また、“設計”事務所が運営までを行う状況でのフィードバックの可能性を探る (30)、多様な活動を重ね合わせるような設計組織とは (31) など、組織のカタにフォーカスを当てるものもあった。さらには、多様な主体が参加する場における計画やデザインの展開とその可能性 (32) や、人々の能動的な関与が生み出す空間の持続性など (33) 協働のための条件を探るカタの議論も展開された。

これまでのセッション数は通算して33回となり、確かな議論の蓄積を感じる。参加者も220組を超え、プラットフォームとしての存在意義も高まっており、今後はこの蓄積されたネットワークとアーカイブの活用を検討していきたい。



会場風景

[辻琢磨／403architecture [dajiba] 共同主宰  
川勝真一／RAD共同主宰]

## 学生ワークショップ2019

ワークショップ・展示「令和元年の建築系研究室」  
10月26日④、27日⑤に、建築会館ホールで学生ワークショップ2019「令和元年の建築系研究室」が開催された。この学生ワークショップは、建築文化週間の一環として、有志が集まった学生が内容を企画し、毎年異なるイベントを運営するものである。本年は全国の建築系研究室に所属する学生が集まり、建築界の状況を議論する場としてこのワークショップを行った。

同時に建築博物館ギャラリーにて、研究室の活動を広く一般に公開する展示も開催した。展示物は、東京大学佐藤淳研究室のモックアップや早稲田大学古谷・藤井研究室のせんだいメディアテークコンペ案の模型など、なかなか見ることのできない展示物が集まった。

## DAY1

このワークショップでは2つのポイントが重視された。ひとつは各研究室の活動をどのように可視化するかという点

右下…最終発表後の集合写真  
 左下…最終発表の様子  
 右上…キーワードをもとにチームづくり  
 左上…建築博物館ギャラリーでの展示



であり、もうひとつは、初めて出会う全国の学生が短時間でチームによる成果物を提出するために必要な仕組みをどうするかという点である。そこで、我々は会場内に敷いた巨大な座標上に各研究室の活動をキーワードとして配置することでマッピングを行い、参加者がそのキーワードにマーキングすることによって、同じ興味のある学生同士がチームをつくりやすい方法をとった。キーワードは事前に各研究室から5つほどピックアップしてもらい、横軸に建築-都市を、縦軸に周縁-中心を軸としてとり、その上に配置していった。なお、このキーワードの位置は、ギャラリーにおける各研究室の展示キャプションとも連動している。チーム決めではまず、2~3名のユニットを構成し、一番興味のあるキーワードを選んでもらい、次にそのキーワードと組み合わせたいキーワードを会場内を歩き回ることで見つけ、3~4のキーワードをもつチームをつくった。もちろんこの会場で初めて会う人がほとんどではあるが、こうした仕組みによりどのようなチームをつくりたいか、何に興味があるかという話題で会場内は盛り上がりを見せていた。

こうしてつくられたチームにより2日間、ワークショップを行い、令和における建築を考え、成果物として発表した。作業時間が始まるとホワイトボードにひたすらアイデアを書き出していく班、KJ法のようにアイデアをグループ化していく班など、様々な方法で話し合いを進めていた。選んだキーワードの抽象性の違いがこのような違いを生んでいるように見えた。具体的なものは抽象的なキーワードで修飾したり、あるいは具体的なキーワードしかなければそれを掛け合わせたりといった具合である。1日目の締めの中間発表では、様々な大学で指導されている教員の先生方が会場に來られ、各班の提案に多くの意見を加えた。キーワードの多様性も相まって、各班から多様な案が発表された。短い作業時間の成果物ではあったが、どの班も選んだキーワードから考えたいことが少しずつ形になり始めたところで1日目が終わった。

## DAY2

2日目は午前中に作業を行い、模型とプレゼンの準備を行った。最終発表の場は、全国からの学生と年代も幅広い先生方を交え、意義のある議論の場となった。令和における「建築」だけでなく、建築をつくる「プロセス」、建築家の「職能」など非常に幅広い提案がなされた。

最優秀案は「奈良の暮らし」を奈良に関係のない学生同士がスケッチを交換しながら考え、最終的に一つの建築にするというものであった。建築をつくるプロセスにおいて、平成には市民ワークショップを行うことが増え、建築家同士がチームを組んで行うプロポーザルも多くなったが、そうした変化のなかで、建築の専門家同士でワークショップ的な形式により案を出すというプロセスの可能性を見いだした案だったように思える。コメンテーターとして参加された五十嵐先生からは、なぜ今の時代にこの案が評価されるかについての議論をもっとすべきという指摘もあった。

優秀案は、普段日常で使っている家具を街中に出してランドスケープをつくる提案であった。また、災害をテーマにした案や建築と土木の役割を見直す提案もあった。どの提案も令和の時代に何を考えるべきかというヒントであると同時に、多様な研究室の学生が集まったからこそ出てきた提案であった。

最後に、このような貴重な機会をくださった建築文化事業委員会、ご支援くださった協賛企業、そして運営の学生スタッフの皆様がこの場を借りて御礼申し上げる。また、延べ203名という多くの学生が22大学から参加した。加えて、少数ではあるが、高校生、社会人からの参加もあった。参加いただいた方々に、今一度記して感謝申し上げます。

実行委員は、木元那奈・朱純嘩・長谷川和貴(工学院大学大学院)、須藤瞳(国土館大学)、井口直士・植木柘地・権純碩・松田出帆(東京大学大学院)、川原田健人・仲山千文(東京電機大学)、木村拓登・高橋将人(日本工業大学大学院)、飯泉拓・上杉菜緒・迫田千尋・濱田浩太・宮田優衣(武蔵野大学)、矢野桂都・原村涼加(安田女子大学)の7大学19名で務めた。

## 学生グランプリ2019

### 公開審査「銀茶会の茶席」

今年度の応募数は54作品であり、8月9日㊦に建築博物館ギャラリーにて開催された第一次審査会にて、第二次審査に進む入選4作品ならびに各々審査員賞1作品を選考した。なお、審査は公開され、応募作品の所属・応募者名はブラインドされて行われた。8月16日㊦には1/1模型制作説明会を行い、建築文化事業委員および銀茶会関係者によって構造エスキスチェック、茶席のレクチャーおよび審査員賞の表彰が行われた。

### 第一次審査結果

〈入選〉1/1模型制作

No.5 透綾 — レシプロカル構造による折畳み式可動茶席  
上間梨乃ほか15名 武庫川女子大学大学院

No.19 織折庵

重村浩槻ほか6名 慶應義塾大学大学院／慶應義塾大学

No.23 哀糸豪竹

植木祐地ほか2名 東京大学大学院

No.48 竹編 — 竹と空気の綾文様

須釜崇弘ほか2名 東京理科大学大学院

〈審査員賞〉

### 鵜飼哲矢賞

No.8 蔀

嶋村友佑ほか4名 熊本県立大学

### 本阿彌守光賞

No.19 織折庵

重村浩槻ほか6名 慶應義塾大学大学院／慶應義塾大学

### 斎藤公男賞

No.22 ∞庵

幕田早紀ほか3名 千葉大学大学院／早稲田大学

### 木村知弘、中村晃子賞

No.23 哀糸豪竹

植木祐地ほか2名 東京大学大学院

### 原田裕季子賞

No.26 移ろいの視差

大川裕貴ほか3名 芝浦工業大学

### 濱野裕司、松田達賞

No.37 素透籠庵

林恭平ほか2名 広島大学／広島大学大学院

### 風間喜一、坂口裕美賞

No.47 ashura

柳沼明日香ほか6名 日本大学院／日本大学

### 山本豊津賞

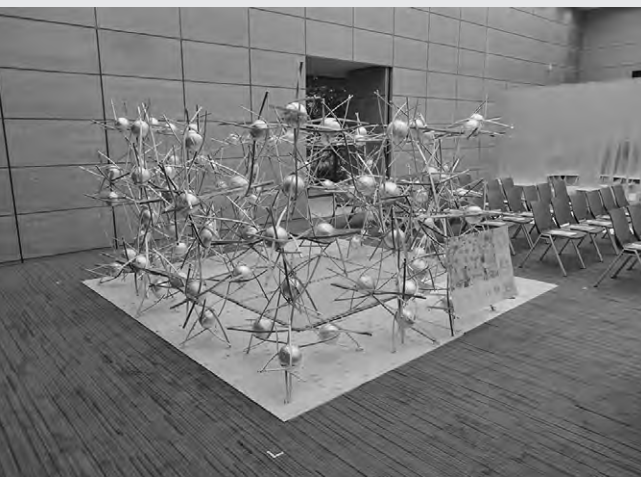
No.48 竹編 — 竹と空気の綾文様

須釜崇弘ほか2名 東京理科大学大学院

### 佐藤淳賞

No.50 四海波庵

松田理沙ほか5名 文化学園大学



右下…入選…哀糸豪竹  
左下…入選…織折庵  
右上…優秀賞…透綾—レシプロカル構造による折畳み式可動茶席  
左上…最優秀賞…竹編—竹と空気の綾文様

10月6日⑩に、建築会館ホールにて第二次審査会が開催され、第一次審査を通過した4作品は1/1模型を応募学生自らが制作し、公開審査によって最優秀賞、優秀賞を決定した。最優秀賞作品「竹編—竹と空気の綾文様」は実施施工され、10月24日⑫～28日⑬の間、銀座三越にて銀茶会の茶席として実際に使用された。参加者は240名であった。

第二次審査結果

〈最優秀賞〉

No.48 竹編 —竹と空気の綾文様  
須釜崇弘ほか8名 東京理科大学大学院／東京理科大学

〈優秀賞〉

No.5 透綾 —レシプロカル構造による折畳み式可動茶席  
上間梨乃ほか15名 武庫川女子大学大学院

〈入選〉

No.19 織折庵  
重村浩槻ほか7名 慶應義塾大学大学院／慶應義塾大学  
No.23 哀糸豪竹  
植木祐地ほか9名 東京大学大学院／東京大学

〔鶴岡哲矢／九州大学准教授〕

トウキョウ建築まち歩き2019

見学会「日本橋・本所・深川 まちのタカラ探し」

日本橋、本所、深川は、それぞれ旧東京市の日本橋区、本所区、深川区にあたる地区である。日本橋区は現在の中央区の北側で、東京駅八重洲口から延びる八重洲通りから北側の地区である。本所は墨田区の南側、深川は江東区の北西側にあたり、本所、深川は隅田川を挟んで日本橋と向き合っている。

下町の定義は様々だが、江戸・東京では、山の手の「武家地」に対して低地の「町民地」を下町と呼ぶのが一般的だ。なかでも日本橋は徳川家康が江戸入府（1590/天正18年）直後に最初につくった町人地である。今回は、そんな下町の元祖の日本橋からスタートして、隅田川を越えて拡張した下町の本所、深川を見学するまち歩きであり、10月14日（月・祝）に開催され、37名の参加者とともに巡った。

さて、まち歩きの面白さのひとつが、地形の高低差を足で感じ、地形がつくる風景から時間を遡ることにある。昨年まで歩いてきた渋谷や本郷は山の手であり、地形とまちの成り立ちのを感じるまち歩きだった。それに対して今年の下町は、集合場所の日本橋北詰辺りの標高が4m、旧日光街道を辿って浅草橋で2m、両国橋を渡った本所、深川の隅田川近くで1~2mで、そこから東は1m以下とほぼ真っ平らである。

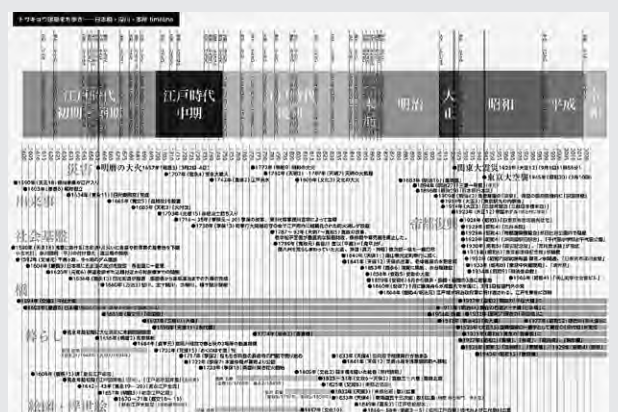
川と堀（およびその痕跡）、そして道と橋でかたちづけられるまちの骨格は、地図（平面図）から読み取ることができる。一方で、平らな地上から見えるのは、まちのエレベーション（立面図）と、道の行く手にチラリと見える遠景だ。そこで、古地図と風景が描かれた浮世絵、そしてまちの年表を携えて、行程を巡ることにした。

ルートのなかのタカラは数多く、ここでは書ききれないが、少しでもご紹介しておくと、本所の都立横網町公園の「東京都復興記念館」（1931/昭和6年、設計：伊東忠太・佐野利器）と、その2階に展示されている1929（昭和4）年に開催された帝都復興展覧会出品模型のなかでも、震災復興でつくられた昭和通りの断面模型をご覧いただきたい。幅の広い歩道と両側に植樹帯を配した路面電車が走り、地下のインフラまで作り込まれている。一方で現在、植樹帯と路面電車はアンダーパスとなり、まち歩きのルートの旧日光街道は、上部に首都高速道路が走る昭和通りで分断され、地下歩道があるばかりである。

更新が繰り返されるまちの佇まいには、その場所に関する人々のまちへの想いの濃さ（ときには薄さ）が映し出される。

今回の行程と年表は建築文化週間の特設Webサイト（<http://bunka.aij.or.jp/machiaruki/>）で公開しているのでぜひ

右下…年表  
右上…ガイドマップ  
左…東都大伝馬街繁栄之図 広重（国立国会図書館デジタルコレクション）



ご覧いただき、それぞれにタカラを探していただきたい。

[大森見彦／建築メディア研究所代表]

## 建築文化週間2019開催報告（支部企画）

日本建築学会

### ●北海道支部

#### 見学会「石炭のまち三笠の足跡を巡る」

北海道空知に位置する三笠市は、明治の開拓使時代から昭和の戦後復興にいたるまで、石炭のまちとして日本の近代産業を支えながら発展してきた。閉山後の今日では、全国初となる石炭をテーマとしたジオパークとしてまちづくりを推進しており、新たな局面を迎えている。また2019年には、三笠市を含む12市町がかかわる石炭・鉄鋼・港湾・鉄道を結びつけたストーリーが、文化庁の「日本遺産」に認定された。今回の見学会は、このように炭鉱遺産に注目が集まるなか実施される運びとなり、10月12日④に日本建築学会北海道支部歴史意匠専門委員会主催のもと、開催された。

見学会は三笠市立博物館に始まり、次いで旧幾春別炭鉱錦坑、昼食をはさみ旧住友奔別炭鉱、旧北炭幌内炭鉱を巡った。博物館では、まず学芸員から炭鉱の歴史やまちづくり、炭鉱に従事していた人々の暮らしや仕事の様子などの説明を受けた。展示物のなかには実際に炭鉱で使われていた機器も数多くあり、リアリティある解説に参加者らは興味をもって聞き入っていた。

旧幾春別炭鉱錦坑では、三笠の地層の特徴について学びつつ露頭を見学し、次いで坑口、立坑櫓、捲揚室、変電室などを見学した。採炭のためのこれら施設が間近にまとめて見ることができる遺構は大変珍しく貴重である。当委員会委員による解説では、これまでの研究成果を踏まえ、学生らと行った実測調査のエピソードを交えながら話がすすみ、終始和やかな雰囲気の中で時間が過ぎていった。

昼食会場となった旧空知信用金庫三笠支店幾春別出張所は、三笠ジオパーク推進協議会がジオパークを学ぶ場として改修した建築であり、場内には往時の様子を紹介する映像が流れていた。また、錦坑のジオラマ模型も展示されており、参加者らは休憩時間を使って午前中に見学した遺構について更に理解を深めていた。

昼食後に向かった旧住友奔別炭鉱では、まず立坑櫓を背景に同炭鉱の沿革や現況の説明があり、積込ポケット内の引き込み線跡では多くの参加者らはその薄暗く長大な内部空間に圧倒された様子であった。旧北炭幌内炭鉱では、特別な許可が無い限り普段は入ることのできない変電所内部を見学し、道内最古の坑口である音羽坑坑口で見学会を締めくくった。

当日は雪虫が飛び交う肌寒い空模様であったが、41名の参加者らは終始熱心に遺構を見学し、産業遺産をより身近に体感できる大変有意義な一日となった。最後に、見学会の準備から当日のガイドまで行き届いたサービスを提供いただいた共催の三笠ジオパーク推進協議会の皆様、見学会開催にあたってご協力くださいました全ての関係者の方々に記して感謝申し上げます。

[西澤岳夫／釧路工業高等専門学校准教授]



上…旧奔別炭鉱立坑櫓前での集合写真  
下…旧北炭幌内炭鉱変電所内の見学風景

### 第44回「北海道建築賞(2019年度)」表彰式・記念講演会

第44回北海道建築賞の表彰式・記念講演会が、10月25日⑤夕刻より北海道大学遠友学舎において開催された。会場には建築業界関係者をはじめ大学関係者、学生、一般市民を含め70名が集まり、親密な雰囲気のなかで行われた。表彰式は、千歩修北海道支部長の挨拶に続き、北海道建築賞として「重箱(ちょうそう)の家」(堀尾浩君／堀尾浩建築設計事務所)、北海道建築奨励賞として「カトリック東室蘭教会聖堂」(山田深君／室蘭工業大学)が発表され、千歩修支部長より各受賞



上…表彰式  
下…パネルディスカッション風景  
写真撮影…加藤誠



者に表彰状と副賞のブロンズ彫刻が手渡された。その後、北海道建築賞委員会主催の加藤より審査経緯・結果および審査講評についての報告がなされた。

委員7名のうち6名が入れ替わった今年度の委員会において、応募のあった13作品について例年通り「先進性」「規範性」「洗練度」を基本的な評価軸としつつ、書類審査によって選ばれた5作品の現地審査を経て受賞作を選定した。この間長い時間をかけた活発な議論の末に得た結果であることが報告された。

北海道建築賞を受賞した「重箱(ちょうそう)の家」は、薪ストーブを生かして上昇気流を促す入れ子状の断面計画、内部と外部を複数の境界で緩やかにつなぐ平面計画によって全体の骨格をつくり、そこに自身が磨き上げてきた環境技術やローテク素材、職人技術を生かしたディテールなどを柔軟に掛け合わせることで、時間の移ろいとともに外の様子を感じることができる作品である。外壁面積と開口部面積を抑えた暖房負荷削減の手法を踏襲しつつ、季節の光や風を効果的に取捨しながら空間全体に光ムラ、温度ムラを作り出し、生活の居場所を選択するきっかけを生みだしている。冬の厳しい北海道ではリスクを伴う挑戦でもあるが、新しい開放性に向けての試みとして高く評価された。

北海道建築奨励賞を受賞した「カトリック東室蘭教会聖堂」は、非常に厳しい建設コスト条件のなかで豊かな空間体験が作りだされた。合理的な架構システム、少ない開口部による十分な明るさ、効果的に光を反射する天井形状、対流を生み出す断面形状と気積の確保といった様々な要素を統合するために、十字形平面を採用してすべてを解決する手法がとられている。その結果、無駄なもののはざとられ、光が作り出す抽象的な内部空間となった。一方、利用者の減少や高齢化が進むなかで、地域開放の可能性を排除しなかったことが高く評価された。

以上の表彰式に続いて受賞者による記念講演会が行われ、堀尾浩君から「重箱(ちょうそう)の家」の設計について、ま

た山田深君から「カトリック東室蘭教会聖堂」の設計についての講演がなされた。ここでは各設計者の作品に対する考え方や設計プロセス、具体的な詳細、さらにそれぞれの設計者の建築的なバックボーンなど多岐にわたる内容のプレゼンテーションによって、各作品についての理解を深めることができた。

その後に行われた記念パネルディスカッションでは、委員会メンバーが司会・進行を務め、設計者と対話する形で進められた。プレゼンテーションの内容をベースとした深い議論が展開され、作品の背景などを深く聞くことができた。寒冷地における開かれた建築、場所の空気と呼応する空間といった2作品に通底するテーマについての議論によって、作品に対する理解を深めるとともに北海道の建築の歴史とこれからを俯瞰するイメージを得ることができた。

第44回を迎えた北海道建築賞は、日本建築学会各支部の建築賞のなかで最も早くに創設されたものであり、地域性を意識した北海道ならではのものである。長い年月にわたって「北海道の現代建築」を位置付ける機軸を担ってきたことは確かであろう。この北海道建築賞表彰式・記念講演会を今後も建築文化週間の行事として継続していくことが、この場の発展のためにも望ましいと考えている。

[加藤誠／北海道建築賞委員会主催]

### ワークショップ「くしろ防災屋台村」

建築文化週間事業として、日本建築学会北海道支部では主に小さなお子さんとその保護者を対象に、地域で防災を学ぶイベントを開催している。本年度も昨年に引き続き、北海道釧路総合振興局との共催で、釧路市こども遊学館を会場に第10回くしろ安心住まいフェアにて10月26日④ 10:00～16:00に開催した。この事業の特筆すべき点は、住まいに関する防災知識および住まいの知識向上を図ることによ

右下…揺れに負けない模型を作れるかな？  
左下…建物はどうな揺れ方をするかな？  
右上…作った模型を揺らしてみよう  
左上…建物の模型を自分で作ってみよう



り、災害に強く、安心で、質の高い住まいづくりの推進に寄与することを目的とし、釧路管内の建築関係団体と協働して開催していることにある。当日は前夜から降り続く強い雨の影響もあり、前年より参加者数が減ったものの、計278名の参加があり、未就学児から大人まで幅広い年齢層に参加していただいた。開催中は来場者が途切れることがなかった。

くしろ防災屋台村のコーナーでは、「つくって、ゆらしてみよう」と題して、いろいろな長さの竹ひごとスーパーボールや、いろいろな大きさの厚紙やスチレンボードなどで建物模型を作ってもらい、それをポータブル振動台に載せて、揺れ方や壊れ方を観察した。さらに竹ひごを斜めにブレースとして入れたり、厚紙を壁として入れたりなどの補強を試し、どの様な建物が地震に強いかを遊びを通して体験した。

なお、くしろ安心住まいフェアでは他の団体も工夫を凝らした出展内容となっており、いずれも参加者の評価が高かった。

〔麻里哲広／北海道大学助教〕

## ●東北支部

### 第30回「東北建築作品発表会」

10月5日④に、せんだいメディアテーク7Fスタジオシアターにて第30回東北建築作品発表会が開催された。本発表会は、東北建築賞作品賞応募者に作品についてプレゼンテーションしていただくものであり、作品賞の1次審査を兼ねるとともに、学会と地域社会との交流の推進、建築関係者の研鑽ならびに東北地方の地域特性に立脚した建築作品の探求を目的としている。本年度は小規模建築物部門5作品、一般建築物部門24作品の計29作品であった。発表会においては、まず石川善美支部長より挨拶があり、その後、増田聡選考委員長により発表にあたっての注意事項が説明された。その後の発表では、1作品につき8分の短い持ち時間であったものの、設計者から作品のコンセプトやアピールポイントについて充実したプレゼンテーションが行われ

た。質疑応答も2分という短い時間ではあったものの、活発な議論がなされ、活気のある発表会となった。

来場者は延べ150名で盛会であった。今後もさらに関係団体、大学などを通じた積極的な案内を行い、より活気のある発表の場にするよう努めていきたい。

また、第30回東北建築作品発表会で発表された29作品と前年度受賞した第39回東北建築賞作品賞が掲載されている東北建築作品集2019を刊行した。いずれも、近年の東北地方における建築活動の一端を示す貴重な建築作品であり、東北地方の建築にとっての共通課題の探求につながるものである。

〔飛ヶ谷潤一郎／東北大学准教授、日本建築学会東北支部常議員〕

## ●関東支部

### 見学会「シリーズ名作をみる—東京大学大講堂(安田講堂)」

10月2日⑤に、49名の参加を得て見学会が開催された。安田講堂は、内田祥三、岸田日出刀らの設計により1925(大正14)年に竣工し、昭和から平成の歴史の激動のなか時代を超越してその存在感を示してきた東京大学のシンボルでありキャンパスの骨格を形成する中心的な建築物である。生きた文化財として長く人々に愛され使用される建物であり続けるために、講堂の耐震化、防災機能の強化およびバリアフリーへの対応等をねらいとした全面改修が行われ、第26回BELCA賞を受賞している。

この安田講堂の魅力をご紹介いただこうと、東京大学大学院教授の千葉学氏にご相談したところ、安田講堂の見学に加え本郷キャンパスの歴史をたどりながら、キャンパス内を巡るツアーをご提案いただき、今回の見学会となった。

当日の集合は工学部1号館(1935年竣工)「内田ゴシック」のリノベーション作品のなかでキャンパス計画および安田講堂について講義が行われた。関東大地震からの復興を担った内田祥三の本郷校内構想に始まり、全学再開発の嚆矢となる香山壽夫の工学部再開発計画、続く本郷地区キャンパ



上…石川善美支部長の挨拶  
下…プレゼンテーションの様子



上…工学部1号館15号講義室における講義の様子  
下…安田講堂大講堂における解説の様子

ス再開発・利用計画要綱策定から現在に至る経緯について語られた。安田講堂については、創建当初の姿に戻す復原を大きな方針としつつも、現代の講堂としての機能性を担保するために必要ならばデザイン上の改変も許容するという柔軟な方針で臨んだことや、文化財としての価値は尊重しつつも建築は使われて初めて価値があるという共通の認識を持ち大改修に臨んだことが語られた。

講義後、工学部1号館のリノベーションを見学し、キャンパス内を巡るツアーを行った。法文1号館(1935年竣工)、工学部6号館(1938年竣工)と一連の「内田ゴシック」への香山壽夫による増改修を見ながら学生第2食堂(1934年竣工)へ向かう。加賀藩と富山藩の軸線の違いに起因する本郷キャンパスの結節点を確認し、総合図書館(1928年竣工)を経由して安田講堂へ向かい、道中では「内田ゴシック」の他、歴代モダニズムの巨匠たちの作品やキャンパスにおける緑地軸と公共空地について解説いただいた。安田講堂では改修の基本方針や手法について具体的な説明を伺った。創建当初の自然光の導入を復原の柱として実現した光の降り注ぐ講堂の内部空間は品格と流麗さにあふれ、貴重な空間体験となった。

140年の歴史が重層する本郷キャンパス内の施設群を千葉氏の解説で巡るまたとない機会を得られ、参加した多くの方からも高評価をいただいた。千葉氏をはじめ見学会開催にご協力いただいた全ての方々に記して感謝申し上げる。

〔藤本裕之／日本建築学会関東支部事業企画委員長、清水建設株式会社設計本部〕

## 構造デザインフォーラム2019(第25回)

### 「力学から東京オリンピックへ」

日本建築学会関東支部構造専門研究委員会(設計WG)主催の構造デザインフォーラム「力学から東京オリンピックへ」が11月9日④ 15:00~18:00に行われた。1995年にスタートして今年で25回目を迎えた構造デザインフォーラムは、恒例の建築文化事業の一環に位置付けられており、昨年同様、建築博物館ギャラリーで11月6日④~13日④に開催された「アーキニアリング・デザイン展(AND)2019-構造技術が拓く建築と空間」との連携を図っての開催となった。今年度の構造デザインフォーラムは、「力学から東京オリンピックへ」と題し、実在する建築物を題材に5つの構造システム

の力学的な特徴や計算方法などについて5名の学生により講演された。講演者は、田中章仁氏(千葉工業大学)、酒井和章氏(日本大学)、青山ないる氏(早稲田大学)、野呂航氏(日本大学)、金子春花氏(日本大学)である。全体の進行はモデレーターの高橋公男氏(日本大学名誉教授)が行い、司会を山我信秀(NTTファシリティーズ、WG主査)が行った。参加者数は、90名(社会人30名、学生60名)と多くの方々に参加いただいた。特に学生の参加者が多く、同年代の学生の発表への関心の高さが感じられた。

#### ・サスペンション構造／国立代々木競技場

田中氏より、国立代々木競技場を題材としてサスペンション構造について発表があった。サスペンション構造の原理について、メインケーブルを取り出し、力の流れや吊り荷重に抵抗するバックステイの必要性などの説明があった。メインケーブルについて、略算式を用いて計算し、必要な断面の想定を行っていた。吊り屋根は、ケーブルネット案とセミリジット案を模型を用いて比較し、ケーブルネット案では、構造的フォルムと意匠的フォルムに差が生じてしまうため吊り鉄骨による架構となったことが説明された。

#### ・アーチ／新国立競技場(旧計画)

酒井氏より、新国立競技場(旧計画)を題材として、アーチ構造について発表があった。円弧アーチと放物線アーチの比較説明や、アーチ構造を計画する際に注意が必要なスラストの処理についての説明があった。スラストの処理方法が解決すれば、合理的な構造であることを単純梁と比較していた。新国立競技場(旧計画)のキールアーチを題材に、アーチ構造の計算を手計算にて行っており、放物線アーチと円弧アーチの応力、変形について、形態による違いを説明された。

#### ・片持ち梁／新国立競技場

青山氏より、新国立競技場を題材として、片持ち梁について発表があった。第1回近代オリンピックの競技場には屋根がなく、その後スタンドルーフの必要性が高まり、ミュンヘンオリンピック以降、高いデザイン性と構造技術を両立する競技場が多く計画されていた。スタジアムの屋根架構として、片持ち梁だけでなく、スペースフレーム、天秤構造、吊り構造、フープ構造、シェル構造などについても

齋藤公男氏(日本大学名誉教授)



田中章仁氏(千葉工業大学)



酒井和章氏(日本大学)



青山ないる氏(早稲田大学)



野呂航氏(日本大学)



金子春花氏(日本大学)



説明があり、それぞれの特徴や事例が示された。新国立競技場の片持ち梁をモデル化し、手計算にて断面算定を行っていた。

#### ・有明アリーナ

野呂氏より、有明アリーナを題材として、単純梁について発表があった。単純梁の構造については、支持条件が固定とピンの場合の比較が示され、梁としては両端固定とした方が有利であるが、支持構造に対しては曲げが発生するというデメリットがあり、全体的に考える必要があることが説明された。計算では、トラス梁を単純梁に置き換えてモデル化し、曲げ応力をトラスの軸力に変換して断面算定を行っていた。最後に、建築計画、構造計画、施工計画が相互に影響し合い、一体となって建物となるとまとめていた。

#### ・有明体操競技場

金子氏より、有明体操競技場を題材として、張弦梁についての発表があった。両側の片持ち架構の中央に低ライズの張弦梁が計画されているが、中央の架構を単純梁や低ライズのアーチ、張弦梁とした場合の比較を模型実験にて行っていた。実験では、単純梁や低ライズのアーチよりも張弦梁の方が、耐荷重が大きくなっていった。束が1ヶ所の張弦梁の計算方法に加え、複合型の張弦梁の手計算での計算方法の説明があり、分解することにより、単純な構造力学の知識だけで計算することを説明していた。

#### ・質疑応答

講演後に講演者5名にモデレーターの斎藤氏を加え、質疑応答を行った。質問者また講演者より、発表についての感想が述べられ、大学の教育では学べない実務設計について勉強できたことが良かったという意見があった。構造デザインフォーラム終了後に、ギャラリーへ移動し、アーキニアリング・デザイン展にて講演者が作成した展示物の説明があり、活発な質疑、意見交換が交わされていた。

[山我信秀/NTTファシリティーズ]

### ●東海支部

#### 見学会「建築ウォッチング—栄タワーヒルズ」

今年の建築ウォッチングは、10月12日(土)に栄タワーヒルズの見学会として、22名の参加を予定していたが、台風19号の接近に伴い中止とした。

[佐藤篤司/名古屋工業大学准教授、  
日本建築学会東海支部事業委員会委員長]

### ●北陸支部

#### たてもの探偵団2019

#### 見学会「とやまのモノづくりと景観—能作と砺波の散居村」

日本建築学会富山支所では10月5日④に、「とやまのモノづくりと景観—能作と砺波の散居村」と題して、毎年恒例の見学会「たてもの探偵団2019」を開催した。今回は、富山県の特徴としてよく知られている「モノづくり」と「豊かな田園風景」をテーマに、能作 本社工場や若鶴大正蔵、砺波地方の散居村を訪ね、地域に根付き継承する伝統の姿を探访した。県内の学生や建築関係者のみならず、他県や家族連れの参加者など計25名の参加があった。

加賀藩2代藩主 前田利長が開いた高岡城下町で栄えた鋳物産業をルーツとする能作の「本社工場」(設計: 広谷純弘アー



上…若鶴大正蔵での様子  
下…散居村見学の様子

キヴィジョン広谷スタジオ)では、建物を巡りながらその歴史を丁寧に解説いただくとともに、職人が作業する製作の現場を見学し、現代に生きる伝統技術を肌で体験した。

次に、1922(大正11)年に建設された若鶴酒造の酒蔵を創業のシンボルとして研修施設に再生した「若鶴大正蔵」(設計: 峰谷俊雄+金沢計画研究所)を見学した。伝統的な土蔵造りの外観の内部を、古い架構を活かした階段状の空間として改修・再生したもので、木部に残る痕跡など、酒蔵の歴史に触れながら階段を上り下りする参加者の姿が印象的であった。

お昼からは砺波地方に移動し、この地方の特徴であるアズマダチの民家を改修した「農家レストラン大門」で郷土料理をいただいた後、チューリップ公園内にある「旧中嶋家住宅」を見学した。旧中嶋家住宅は、砺波地方に残る民家のなかで最も古いもので、ワクノウチ造りによるヒロマを中心としており、間取りの基本形を学んだ。

続いて散居村の見学では、黒野弘靖氏(新潟大学准教授)に散居村の村落構成について解説いただきながら歩いた。土地所有の変遷や水路のネットワーク、道と家の向きの関係など、目の前の散居村の背後にある構成原理を丁寧に説明いただいた。最後は舟戸橋付近の展望地点より砺波平野を一望、参加者からの質問や議論も弾み、散居村を理解する大変有意義な機会となった。

[森本英裕/職藝学院専任講師]

第9回 越前・若狭の建築文化探訪  
見学会「丸岡城天守・新知見と新たな謎」

日本建築学会福井支所は、支所の活性化および会員、会員外の親睦を深める目的として、「越前・若狭の建築文化探訪」を毎年、建築文化週間に位置付けて企画・開催している。第9回目となる今回は、「丸岡城天守・新知見と新たな謎」と題し、10月5日④に開催された。近世の現存天守12基の一つである丸岡城天守を見学した。丸岡城天守は、国宝化に向けて2015年度から2018年度にかけて、建築や石垣、考古、歴史などの専門家が学術調査報告を実施し、2018年度末(2019年3月)にはこれらの成果をまとめた『丸岡城天守学術報告書』が発刊されている。

今回の見学会では、丸岡城調査研究委員会の会長である吉田純一氏(FUT福井城郭研究所顧問)のもと、昨年度までの学術調査研究によって判明した、新たな知見とそれによって出てきた謎について現地で解説いただいた。

当日は、丸岡城に初めて訪れる参加者もいたことから、まずは集合場所である一筆啓上茶屋前にて丸岡城の曲輪について、近世の絵図と現在の地図を重ね合わせた図を用いて解説、その後、天守の外観の建築的特徴を天守前にて説明後入城し、内部や新知見について説明された。内部では建

築形式だけでなく、近世の修理時に入れられた材や柱や床板に残る刃痕などを説明し、特に丸岡城天守の建築年代については、これまで柴田勝豊が城主となった1576(天正4)年頃で日本最古の天守と呼ばれていたが、床下に保管されていた旧望楼部の隅柱(2、3階の通し柱)が、科学的な木材年代測定である $\delta$ 180年輪年代調査によって1626年+数年程度であることが判明したことによって、天守の建築年代は50年ほど下がり、寛永期に造られた可能性が高いことを実際の部材を示しながら解説した。

参加者数は6名であったが、その分、講師の吉田氏と参加者の距離が近くなり、解説やそれに伴う質疑など非常に良好な雰囲気なかで実施され、予定時間を45分程超過して見学会を終了した。

[多米淑人/福井工業大学教授]

シンポジウム「地方に人が集まる場の作り方」

日本建築学会富山支所では、西田司氏(オンデザインパートナーズ代表、東京理科大学准教授)を招いた講演会を、10月17日④富山県民会館にて開催した。会場には建築を学ぶ学生をはじめ、県内の設計事務所や建設会社の方、一般参加者など計68名が集まり、西田氏の建築への取り組み方、そこから生まれる場の在り方に耳を傾けた。

第一部では、西田氏の近年の取り組みが紹介され、特に「Beyond Architecture」というキーワードのもと、種々雑多に広がりつつある建築家の職域を対話型の方法によって横断し繋げていく事例が取り上げられた。他分野の活動との発見的な協働によって展開された多様な事例は、聞き手の視野を否応なしに広げるものであった。

第二部は、萩野紀一郎氏(萩野アトリエ、富山大学准教授)の司会のもと、西田氏が会場からの質問に回答するディスカッション形式で行われた。仕事の生み出し方や所員の育て方、事務所のマネジメントから都市の公共性まで、質問者と対話を重ねる西田氏に会場からは次々と質問が寄せられ、予定時間を超えての議論となった。領域を横断して建築を捉えなおしていく西田氏の姿勢から、参加者はそれぞれの立場で様々なヒントをいただいたのではないだろうか。

ディスカッションの様子



[森本英裕/職藝学院専任講師]

吉田純一氏による解説の様子



地域再生や活性化等に関する見学会および講演会  
「限界集落の再生・活性化活動—勝山市小原集落の事例」

福井県勝山市北谷町小原集落では、2006年から(旧)地元民、大工棟梁、福井工業大学建築土木工学科との連携事業とし



上…講演会の様子 下…集落見学会の様子



上…谷口吉郎・吉生記念金沢建築館を見学  
中…にし茶屋街を散策する参加者  
下…寺町台の路地を散策する参加者



て小原ECOプロジェクトを立ち上げ、集落人口1名という廃村が迫った小原集落の再生・活性化に取り組んでいる。今回は、これまでの14年間で行った様々な活動の内容を紹介し、事業継続の在り方などについて解説する見学会および講演会を10月19日④に開催した。

当日は13名が参加し、修復した民家で建築の特徴や修復箇所、状況などについて集落内を散策しながら多米淑人（福井工業大学教授）より1時間程かけて解説した。その後、修復済みの民家である道場家住宅内にて國吉一實氏（小原ECOプロジェクト代表）から小原集落内における小原ECOプロジェクトの概要や活動、これからの展望などについて講演いただいた。

散策中には、民家の柱や梁、壁木舞の材種や修復作業においてどのように学生が関わっているかなどの質問があり、多米より適時解説した。國吉氏による講演後の質疑では、小原ECOプロジェクトの世代交代の進捗状況やなぜ小原集落において活動しているのか、他の地区での活動を行なっているのか等の質問があり、國吉氏より丁寧に説明された。

見学会および講演会は、質問などもあり、和やかで良好な雰囲気のなか、予定の12時に終了した。

[多米淑人／福井工業大学教授]

## 見学会

### 「金沢市寺町の建築文化をめぐるまち歩きツアー」

日本建築学会石川支所では、4年前より建築文化週間の催しとして、金沢のまちあるきにより建築文化に触れる企画を行っている。今年は、金沢市寺町の建築文化をめぐるまち歩きツアーを10月19日④に開催した。寺町周辺は寺町台重要伝統的建造物群保存地区に指定され、寺社が集合した独特な歴史的まちなみが残る魅力的な景観を有している。また、にし茶屋街にも近く、散策をしながらまちあるきをするには素晴らしいエリアとなっている。2019年夏には、谷口吉生氏設計の「谷口吉郎・吉生記念金沢建築館」もオープ

ンし、新たな魅力も加わった。歴史的建築やまちなみ景観をゆっくりと眺めながら巡り歩くことで、普段気がつかなかった新しい金沢の魅力に気がつく機会となった。

当日は残念ながら雨模様となり、傘をさしながらのまちあるきであったが、金沢在住の20代から50代まで男女13名の参加があった。まちあるきのガイドは、金沢工業大学准教授の宮下智裕が行った。にし茶屋街観光駐車場からスタートして、にし茶屋街の検番や茶屋、近年リノベーションされた飲食店などを巡るとともに、その建築の特徴などについて説明した。その後、北國街道沿いに建てられた石置き屋根の町家などを見学しながら、金沢最大規模の広見である「六斗の広見」を訪れた。また、老舗料亭のつば甚横

にある甚兵衛坂や蛤坂などを巡りながら坂の魅力に触れ、そこから見渡せる犀川の趣のある風景を楽しんだ。最後に金沢の新しい建築スポットとなった谷口吉郎・吉生記念金沢建築館を見学し、約2時間半のまちあるきは終了した。

参加者からは、「金沢に住んでいるが初めて歩いた道がたくさんあり、新しい気づきがあった」という声や、「普段車で通っていると高低差をあまり意識しないが、歩いてみると地形の変化の大きさに驚いた」「こういう機会をきっかけにこれからも散歩してみたい」などの声が聞かれ、改めて金沢の風土、景観、建築の魅力を感じる1日となった。

[宮下智裕/金沢工業大学准教授]

## ●近畿支部

### 近代建築講演会および見学会

「**尼崎市庁舎・大庄南生涯学習プラザ(旧大庄村役場)**」  
去る11月1日㊟、建築文化週間事業の一環として、日本建築学会近畿支部主催による**尼崎市庁舎・大庄南生涯学習プラザ(旧大庄村役場)**の見学会と講演会を開催した。

大庄南生涯学習プラザ(旧大庄公民館/旧大庄村役場/1937年竣工)は、村野藤吾が初めて設計を手掛けた庁舎建築である。抽象的な箱を組み合わせたモダニズム建築だと言えるが、外壁は茶色いタイルで覆われ、塔を備え、所々に装飾を備えているという古風さも併せ持っている。村野が1930年にヨーロッパを訪問した際に感銘を受けたというストックホルム市庁舎(1923年竣工)の影響が感じられる。国の登録有形文化財となっている。

一方、尼崎市庁舎(1962年竣工)は、高層棟と低層棟、議会棟の3つの棟からなる鉄筋コンクリート造の建物である。外壁は灰色のタイルで覆われ、いわゆる装飾を排除したモダニズム建築によるものだが、随所に抽象的な形態を用いており、凝ったデザインが見られる。また、低層棟に「市民

ホール」を備えているが、これは当時、全国的に普及した丹下健三によって提案されたものとは異なるタイプの、村野独自の「市民ホール」の姿をしている点に大きな特徴がある。

尼崎市庁舎については、耐震改修が行われるのに先立って2015年12月に日本建築学会近畿支部より「**尼崎市庁舎の改修に関する要望書**」を提出した。その結果、外観にブレースなどが現れない、良い形で耐震改修が行われた。今回は、その改修の様子についても見学し、モダニズム建築の歴史的な価値とともにその改修の在り方を考える機会となった。

最初に大庄南生涯学習プラザにて講演会を開催し、笠原一人(京都工芸繊維大学助教)より「**村野藤吾と尼崎の2つの庁舎建築**」と題して講演した。その後見学会に移り、桃谷和則氏(尼崎市立文化財取蔵庫学芸員)と近代建築部会主査である笠原が解説・案内を担当した。大庄南生涯学習プラザでは普段は立ち入ることができない屋上や地下室も特別に見学し、村野藤吾の細部にわたる丁寧なデザインを確認することができた。その後、尼崎市庁舎へ移動し、低層棟の市民ホール、市長室、議会棟の市議会議事堂などを見学。村野のデザイ



右下…旧大庄村役場  
左下…尼崎市庁舎  
右上…見学会の様子  
左上…講演会の様子

ンによる家具も多数残されており、村野ならではのデザインを見ることができた。

今回は尼崎市の職員も含めて78名が参加した。東京など遠方からも複数の参加者があり、関心の高さが感じられた。大庄南生涯学習プラザは、不定期に見学会を開催しているが、尼崎市庁舎はこれまで見学の機会が少なかったため、貴重な機会となった。

[笠原一人／京都工芸繊維大学助教、  
日本建築学会近畿支部近代建築部会主査]

## ●中国支部

### 見学会・講演会「若手デザイナーが語り合う、工芸・建築とそれを支える松江・出雲の文化から糧まで」

日本建築学会中国支部では、建築計画委員会および島根大学総合理工学部建築デザイン学科の共催のもと、見学会と講演会を開催した。城下町や神域として、豊かな歴史と文化をもつ松江・出雲を中心とする地域の魅力、それを基盤として発展した生活工芸品の工房や建築作品の見学とともに、若手デザイナーと学生とが語り合う場を設け、デザイナーのものづくりへの思いを直接感じる機会とした。

#### ・見学会

10月5日④11:00～17:30の見学会バスツアーには、35名が参加され、古民家オフィスみらいと奥出雲（奥出雲町）、出西窯とガラス工房Izumo（出雲市）、家具工房en（松江市）を見学した。たたら製鉄の歴史をもつ奥出雲町三沢の中心地にある旧家をレンタルオフィスとした「みらいと奥出雲」では、設計者の宇田川孝浩氏と奥出雲町役場職員から説明を受けた。出西窯とガラス工房Izumoでは、工房で真摯に作製に取り組む作家たちの様子を直接見るとともに、登り窯や販売施設インテリアも見ることができた。家具工房enは、松江市大庭の緑豊かな丘陵地にあり、民家を改装した木工房と展示スペースを見学した。家具作家の藤原将史氏からは家具や工芸品の製作工程とともに、樹種の違いや国産広葉樹材料の乾燥期間の説明を受けた。見学会を通じて、自然豊かな場所で真摯に作製に取り組む作家たちの息遣いに直接触れ、その活動を支える建築の魅力も感じることもできた。

#### ・講演会

10月6日⑤の13:00～16:00、島根大学総合理工学部3号館多目的ホールで開催した講演会には、島根大学総合理工学部建築デザイン学科の学部2年および3年生を含む、総勢100名が参加した。講演者には、松江で生活工芸品や書籍を専門に扱うDOOR BOOK STOREを運営されている高橋香苗氏、松江市・奥出雲町・出雲市などで活躍する建築家である安井裕之氏・宇田川孝浩氏・原浩二氏の計4名をお迎えした。高橋氏からは工業化・都市の時代から、特に2000年以降は生活工芸品や地方の豊かさに目を向ける人々が増えてきている、手・目・心を一体化させて豊かなものを作っていく文化的なものが松江には残っているというお話があった。安井氏からは、設計された建築作品の紹介とともに、松江で独立して建築設計を行う際のお金に関することやクライアントとの出会い、同世代の作家たちとの交流の大切さ、学生に向けたメッセージについて語ってもらった。宇田川氏からは、島根に戻るきっかけやル・コルビュジェの作品を訪ねた海外旅行記、雪深い奥出雲町の風土や産業に根ざした建築作品の紹介とともに、人との出会いや目先の仕事を大切にすることを語ってもらった。島根大学で設計製図の非常勤講師も務める原氏からは、スタッフを抱える建築



上…見学会の様子  
下…ディスカッションの様子

設計事務所経営での苦勞、自身の年齢に応じて考えてきたこと、山陰の雨の多い気候風土を考えた半屋外空間の提案など最近の建築作品の紹介もあった。講演への感想として、千代章一郎氏（島根大学教授）から、歴史的には工業化と工芸とは流行が繰り返されており、工芸作家によるものづくりには利便性を超えた温もりと質の担保、地方から新たな価値観を発信していくことが大切との感想もあった。その後のディスカッションでは、ゲストの寺本和雄氏・有光礼子氏（ともに寺本建築・都市研究所）からお話をいただきながら、特に工芸品と建築との違いや共通点、デザイナーの金銭面と個人の営みとしての豊かさ、建築における自然系素材と新材材とのバランス、世代を超えて受け継がれる生活工芸品と建築の可能性などについて深い議論がなされた。

講演会の終盤では、学生の田淵輝君（島根大学大学院2年）から現在取り組んでいるコンペ作品、研究室プロジェクト、進路について話題提供があった。田淵君からの「建築の面白さとは」という質問について、原氏からは好きと自分の適性があるかは別である。安井氏からは設計図そのままに建った建築よりも数年後の自分の想像を超えた使い方を見るとワクワクする、リフォームは図面通りにできないから面白い。高橋氏からは自分で考えたり行ったりすることのなかで、腑に落ちたり、手応えを繰り返し得ることが次につながる。宇田川氏からは悩んでいるときに褒めてくれる人がいたことが大きい。寺本氏からは学生時代にずっと建築をどうしてやりたいのかを考えていたが、風景に関わる仕事をしたいと思った。建築は人間の本能と関わることができ、建築を嫌と思ったことがないなど、建築を学ぶ学生に向けた多くのエールが送られた。最後に福田由美子氏（広島工業大学教授）より、建築を本音で語る豊かな会になっていったという感想をいただいた。なお、司会是三島幸子（島根大学助教）、企画およびコーディネーターは細田智久（島根大学教授）が務めた。

[細田智久／島根大学教授  
三島幸子／島根大学助教]



## ●四国支部

### 高知県建築文化賞(県民審査賞)公開審査

高知県建築文化賞(県民審査賞)公開審査は、10月5日④ 13:30～16:30、高知県立県民文化ホール第11多目的室において、高知県建築文化賞実行委員会との共催で実施された。来場者は、地元建築関係者や学生、一般県民など56名が集った。

高知県建築文化賞は、高知県内に竣工された建築物で、高知県の地域と環境に根ざした優れた建築作品に対し贈られる高知県内唯一の総合的・専門的な建築作品賞であり、高知県知事賞(最優秀賞)、優秀賞、木造文化賞、新人賞、県民審査賞がある。

今年度開催の建築文化週間は、この県民審査賞を決めるものである。県民審査賞・公開審査は、応募作品(応募されたパネルは下表の16作品)を審査会場に展示し、一般入場者(県民)一人一人が良いと思われる作品を1位から3位まで順位を付けて投票し、1位となった作品には、高知県建築文化賞実行委員会委員長から、県民審査賞を授与される。その結果、1位は、「北川村あったかふれあいセンター「ゆずの花」(艸建築工房)」となった。

ちなみに、高知県建築文化賞の審査結果であるが、知事賞は「北川村あったかふれあいセンター「ゆずの花」(艸建築工房)」、優秀賞は「竹林寺本坊・庫裏(堀部安嗣建築設計事務所)」と「高知県立林業大学校(細木建築研究所)」、木造文化賞は「なまこ壁を持つ町屋住宅(コウセイアーキテクトデザイン)」、新人賞は「該当なし」となった。

表. 県民審査結果および各賞

No.	作品名	県民審査の順位(票数)	各賞の結果
1	北川村温泉 ゆずの宿	7(11)	
2	住宅のスケール感をもつ診療所	16(0)	
3	北川村ふれあいセンター「ゆずの花」	1(69)	高知県知事賞
4	大柄の家	8(9)	
5	高知県立林業大学校	8(9)	優秀賞
6	ヒナズル	13(3)	
7	竹林寺本坊・庫裏	2(48)	優秀賞
8	RETOROWA	5(18)	
9	HMGワークスビル	11(6)	
10	100年後も愛着の持てる住まい森田邸	15(2)	
11	酔鯨酒造株式会社 土佐蔵	8(9)	
12	なまこ壁を持つ町屋住宅	6(14)	木造文化賞
13	梅ノ森集会所	12(5)	
14	仁淀川町本庁舎	4(19)	
15	美馬旅館はなれ 木のホテル	3(23)	
16	道の駅 よって西土佐	13(3)	

[大谷英二/高知まちづくり支援ネットワーク理事長]

下…県民審査結果を集計している風景  
上…県民が作品を審査している風景



## ●九州支部

### シンポジウム「大分県下旧小城下町の歴史的景観を活かしたまちづくりの課題と可能性」

日本建築学会大分支所では、10月26日④に「大分県下旧小城下町の歴史的景観を活かしたまちづくりの課題と可能性」と題し、歴史的景観の残る大分県内の旧小城下町(臼杵、竹田、杵築)のまちづくりの在り方について、関係者の講演、事例発表、意見交換を行った。大分市内の建築学術活動の拠点となりつつある大分市アートプラザを会場に、一般市民や建築関係者30名の参加があった。

臼杵、竹田、杵築の3市は、現在人口2~3万人程度の自治体で、各市ともに旧城下町を有している。その旧城下町の地区は、近世の町並みの風情を残しており、その歴史的景観をいかに継承しながら今後のまちづくりを行うかが課題となっている。3市は、それぞれ独自の試みで歴史的景観を活かすまちづくりを行っており、その具体的な内容を確認し合うとともに、第三者的知見を交えて議論する試みとして今回のシンポジウムが企画された。

当日はまず、歴史的景観保全事業に詳しい後藤治氏(工学院大学教授)に基調講演をお願いし、その後、臼杵市、竹田市、杵築市の行政担当者に各市の取り組みについて報告いただいた。続けて、末成祐二氏(末成・住まいまちづくり研究所)をコーディネーターとして、会場の参加者を交えた意見交換が行われた。全体の取りまとめは、島岡成治氏(日本文理大学教授)が行った。

まず、後藤氏から「歴史的景観保全事業の地域づくりにおける可能性」と題した講演があり、次に、上記3市の担当者より、以下の題目で事例発表が行われた。「臼杵市の歴史的町並み景観の保全と安全な都市環境の確保の取り組み」(板井優也氏:臼杵市都市デザイン課)、「城下町再生まちづくり」(渡辺一宏氏:竹田市まちづくり文化財課)、「杵築市の歴史的景観を活かしたまちづくり」(金高東清氏:杵築市施策推進課)。これらを踏まえ、末成氏を進行役として、発表者4名によるパネ

ルディスカッションが行われた。まとめとして、後藤氏から、大分県は先端的な取り組みを行っている自治体が多く、今後も各地域がそれぞれの個性を活かしながら連携し、競争力を高めていくことが期待されているとの言葉をいただき、幕を閉じた。大分県は九州内でも観光客の多い地域であり、今後も海外を含めた観光客の増加が見込まれる。歴史的なまちづくりと現代的観光地としての要望、両者の兼ね合いを図りながら、各地域がそれぞれ趣向をこらしたまちづくりを行いつづけることの大切さを改めて再確認するよい機会となった。

[西村謙司／日本文理大学教授、日本建築学会九州支部常議員]



上…後藤治氏による基調講演 下…パネルディスカッション

## 建築書店 Archi Books

### 会員サービス

建築書店では、会員サービスの一環として、本会会員の方は、直営出版物\*を会員特価(定価の10%割引)でご購入いただけます。また、本会発行書籍・資料以外の一般の書籍につきましては、本会会員の方にはポイントカードを発行しており、1,000円ご購入ごとにスタンプ1個捺印し、20個たまりましたら1,000円の割引券としてご利用いただけるようになっています。

なお、遠方の方には、建築学会発行書籍の郵送(会員の方は会員特価+送料無料)も行っておりますので、本会ホームページ「出版図書」よりぜひご利用ください。

\*「直営出版物」とは、本会が出版元となり一般の書店にて定価を付けて販売する書籍を指し、シンポジウム等の資料や論文集、建築雑誌はこれに該当しません。また、「民間(旧四会)連合協定 工事請負契約約款」もこれに含まれませんのでご注意ください。



Photo by Mamoru Ishiguro

問合せ  
 日本建築学会 建築書店 Archi Books  
 〒108-8414 東京都港区芝 5-26-20 TEL03-3456-2018 FAX03-4334-7200  
 E-mail: hanpu@aij.or.jp 営業時間: 9:30 ~ 17:30 定休日: 土曜・日曜・祝日

詳細 <http://www.aij.or.jp/jpn/books/kounyu.htm>